

introduction

わが国では、1970年代以降行われてきた全国的な予防活動などにより発育性股関節形成不全の頻度は劇的に減少したと考えられます。さらに近年の少子化に伴い、発育性股関節形成不全を含めた小児股関節疾患の発生数は減少しました。しかし、スクリーニングを行う医師の診断能力の低下や関心の低下により、乳児検診制度の脆弱化、診断の見落としや遅延などの発生が増えています。このように、次世代を担う若手整形外科医にとって、小児股関節疾患の診断・治療を経験する機会に恵まれないことは憂慮すべき事態であると思われます。そこで今回は、発育性股関節形成不全の基礎と臨床として、最新の話題を含めて特集することとしました。

本特集では、まず発育性股関節形成不全の疫学を確認し、病態については最新の遺伝子・タンパク質発現などの基礎的研究などをレビューしていただきました。若手整形外科医にとって重要である病歴聴取や理学的所見の取り方についても詳述していただいたので、実際の臨床の場で大変参考となると思われます。発育性股関節形成不全の画像診断は超音波を用いることが gold standard ですが、経験に乏しい先生方にとっては馴染みが薄く、近年診断遅延例も散見されます。そこでスタンダードプレーンを描出するための正しいプローブの当て方から、超音波による分類法まで解りやすく解説していただきました。また、スクリーニングツールとしての超音波画像診断のみならず、外科的治療を行うにあたり必要な単純 X 線、CT、MRI などさまざまな検査についてもご紹介いただきました。

発育性股関節形成不全の治療は保存的治療が第一選択となります。患児のご家族と良好な信頼関係を構築することは、以後の治療を進めるにあたり非常に重要です。そのために初期治療としての抱っここの仕方や生活指導を上手に行うためのポイントを説明していただきました。また、Riemenbügel には大腿骨頭壊死などの合併症があり、その装着方法は難しいものです。イラストを交えて正しい装着方法を説明し、装着中の注意点についても解説していただきました。その他、牽引治療や各手術療法の実際と臨床成績についてご紹介いただきました。このように、本特集では、日本におけるエキスパートの先生方に網羅的にわかりやすくご執筆いただいています。

最後に本特集が、読者の先生方にとって知識の整理となり、今後の各施設における発育性股関節形成不全の診断・治療にお役立ていただけることを願っております。

岡山大学学術研究院医歯薬学域
整形外科科学分野
尾崎敏文